



広報

京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻
京都大学医学部人間健康科学科



記念式典で挨拶する坪山直生人間健康科学系専攻長

目 次

○志は高く、かつ地に足をつけて 人間健康科学系専攻長 坪山 直生…………… 2	リハビリテーション科学コース (理学療法学講座) 准教授 青山 朋樹……………20
○博士後期課程開設記念行事を開催…………… 3	近未来型人間健康科学融合ユニット 准教授 石津 浩一……………21
○退任等挨拶	看護科学コース 助教 小西 奈美……………22
検査技術科学コース 教授 笹田 昌孝…………… 4	検査技術科学コース 特定助教 布 樹輝……………23
看護科学コース 教授 成木 弘子…………… 5	検査技術科学コース 特定助教 酒井 晃二……………24
看護科学コース 教授 江川 隆子…………… 6	看護科学コース 助手 福田 里砂……………25
看護科学コース 教授 林 優子…………… 7	リハビリテーション科学コース (理学療法学講座) 助手 山田 実……………26
検査技術科学コース 教授 福田 善弘…………… 8	○特別企画：What is Health? ートップアスリートに聞くー……………27
看護科学コース 准教授 星野 明子…………… 9	○医学部人間健康科学科新入生合宿研修……………31
リハビリテーション科学コース (理学療法学講座) 准教授 笠原 勝幸……………10	○第22回健康科学市民公開講座の報告……………33
看護科学コース 講師 渡邊 浩子……………12	○人間健康科学系専攻内に 「杉浦地域医療研究センター」が完成……………34
看護科学コース 助教 鈴木 麻揚……………13	○人間健康科学系専攻・人間健康科学科 入学試験結果……………35
看護科学コース 助教 高橋 美和……………14	○人事異動……………36
看護科学コース 助教 澄川 真珠子……………15	○日 誌……………38
○新任等挨拶	○あとがき……………40
看護科学コース 教授 細田 公則……………16	
検査技術科学コース 教授 足立 壯一……………17	
検査技術科学コース 教授 中泉 明彦……………18	
近未来型人間健康科学融合ユニット 教授 荒井 秀典……………19	

志は高く、かつ地に足をつけて

人間健康科学系専攻長 坪山直生

人間健康科学系専攻は、「できるだけ多くの人々に健康を届ける」という共通の目標のもとに、関連する学問を推進する研究機関である。平成21年4月の博士後期課程設置に際しては、従来の看護科学、検査技術科学、リハビリテーション科学3コースを網羅する、「近未来型人間健康科学融合ユニット」を開設した。これは、医学系だけでなく、工学、薬学、理学、人文科学系など広い学問領域との協力・連携のもとに健康科学を進めるためのユニットである。

一方医学部人間健康科学科として、優れた看護師、保健師、助産師、臨床検査技師、理学療法士、作業療法士を社会に送り出す、という教育機関としての使命も引き続き担う。4学年あわせて600名を超える学生が学んでいる。私たちはこの若者たちに、単に知識・技術を教えるだけでなく、矜持をもって接し、医療職という仕事への誇り、社会で果たす役割への誇り、技術、学問への誇り、私たちが目指すものへの誇り、これらを伝えていきたいと思っている。

医療技術短期大学部から四年制への移行、修士課程の開設、そしてこの度の博士後期課程の設置をもって、研究・教育機関としての形を整えることができた。多くの先輩方のご努力、文部科学省、厚生労働省、大学、医学研究科、同門会等関係各位のご理解とご尽力、自治体や民間企業の皆様のご協力に改めて御礼申し上げたい。未だ不完全とはいえ、以前に比べるとスペースも拡充された。高井リサーチセンターや杉浦地域医療研究センターといった民間からの貴重なご篤志による施設もできた。組織が形を整えた今、中身を充実させ、人々の健康に貢献する成果を上げていくことが私たちの使命である。既に地域における予防的健康支援システムの開発、ヒト機能の可視化技術の開

発、附属病院との連携でがん医療に関わる急性期リハビリテーション方法論といったいくつかの研究プロジェクトが始まっている。まだまだ未熟な点の多い私たちではあるが、夢を持って、「志は高く、かつ地に足をつけて」をモットーに努力したい。

「入ってきて泣きわめく。それが生。あくびして出て行く。それが死。」これは博士後期課程開設記念講演会で東京女子医大名誉教授の岩田誠先生が紹介して下さったフランスの俚諺である。生死の問題から逃げるのではなく微笑みながら軽かわした洒落た言だと私は思う。組織としての私たちは、新たな出発をしたばかりで、これから成長しなければならない。志を高く保ちながらまず足元を固めるためには、泣きわめくかどうかはともかく、意見の相違を恐れずに明らかにし、冷静に議論をして力強く行動しなければならない。あくびをして出て行っている場合ではないのだ。教職員ひとりひとりが、より良い教育と科学の進歩に大きな責任を負っている。

人間健康科学系専攻博士後期課程開設記念行事を開催

人間健康科学系専攻は、健康科学をさらに発展させ、人の真の健康を創成するため、医学をはじめとする自然科学ならびに人文・社会科学を基盤とし、全人的視野に立って医療・保健・福祉を深く考察した「人間健康科学」の理論を構築し、実践の方法と技術を確立させることにより、高度先進医療に対応できる高度医療専門職の育成と将来の教育者を志す人材の養成を目指し、本年4月に開設された博士後期課程の開設記念行事を実施しました。

百周年時計台記念館において、記念講演会、記念式典ならびに記念祝賀会を行いました。記念講演会は、講演第1部として、松本紘 総長の「無線送電と宇宙太陽発電所」と題した講演の後、フルート、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロによる祝賀演奏を挟み、講演第2部として、岩田誠 東京女子医科大学名誉教授の「キュアとケアー医療人には何が出来るのか」と題しての講演があり、約250名の参加がありました。

岡本道雄 元総長、井村裕夫 元総長ら関係者約150名が出席した記念式典では、来賓の皆様からの祝辞があり、本専攻への大きな期待が述べられました。また、引き続き行われた記念祝賀会では、和やかな雰囲気の中人間健康科学系専攻博士後期課程の門出を祝いました。



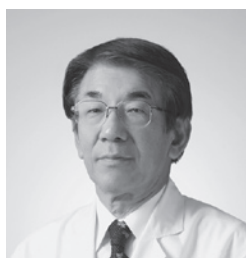
講演する松本総長



祝賀演奏



記念式典で式辞を述べる光山正雄 医学研究科長



望ましい健康の創生に向けて

元検査技術科学コース 教授
現滋賀県立成人病センター総長・病院長
笹田 昌孝

平成21年3月に京都大学を辞し、4月より滋賀県立成人病センター総長・病院長に就任した。新しい年を迎えたこの機会に、京都大学での38年を振り返りながら、これまで受けた教えなどを基に標題について書いてみたい。

昭和45年に本学を卒業し「白血病を治したい」との思いで第一内科に入れて頂き、以来血液学・感染症学を中心に臨床、教育、研究を進めていたところ、ご縁があって昭和62年に医療技術短期大学部に移動した。そこですぐれた医療専門職の方々と出会い、特にその目線、プロ技など、これ迄私の中になかった多くを発見させて頂いた。以来色々考えるうちに「一体全ての人に届けられる健康とは、そしてそれはどうすれば創れるのか」が私にとっての大きな課題となり、多くの人に教えを受け議論しながら今日に至っている。

人の健康についてはWHOが60年以上も前に実证的に的確に把握している。私なりに最も単純な言葉で表せば「からだの健康とこころの健康を」であり、具体的には「健康的に生活していること」ではないかと思う。その原点は自然との共生であり、自然の素晴らしさと厳しさを知りそして自然の摂理に従って生きてゆく。人間が他の動物と違うところは他者を思うこころのゆとりであろうか。子供はのびのびと自然にたわむれ、若者は澁刺と仕事をし、お年寄りはいきいきと孫世代をみている、そんな三世代が共に生活する姿にほっとする。

このような生活の場を実現するためには医学・医療も不可欠ながら自然、文化、教育、情報、ビジネスなどが必要である。これらを基盤とした望ましい健康生活の場にふさわしい医療を考えるのが我々医療者の役割であろう。私なりに必要な医療の特徴を敢えて4項目で表すなら「からだとこ

ころの健康創生」、「国民の自立」、「医療需要の低下と供給の合理的縮小」、「安全・安心・快適な医療」である。そしてこれらを導き出すため「正しい情報の普及と理解の深化」、「情報を含めたトータルシステムの確立」、「医師のみならず看護師など目的を共有する医療専門職の人材育成」、「迅速・的確な医療の実践」が必要となる。

京都大学医学部に我が国初めての「人間健康科学科」が誕生し、平成19年に修士課程、平成21年に博士課程が発足した。時同じくして幸運にも学舎が全面改修され、個人のご寄附による研究棟が2棟建ち、いよいよ本学にしかできない、本学こそやらねばならないことを始動する状況となり、誠に嬉しい限りである。

私は昨年4月に「望ましい健康が創れそうな滋賀県」に思いを馳せて着任し、医療現場から目指す姿に一步ずつ近づけたいと思っている。



感謝を込めて

元看護科学コース 教授（現：国立保健医療科学院）
成 木 弘 子

人間健康科学専攻看護科学分野に赴任したのは、4年制大学になって2年目の春でした。その年の桜は4月になってから満開となり、赴任した直後から一斉に花が咲きました。桜の大好きな私は、鴨川の堤にどこまでも続く桜並木の広がりによって圧倒され、関東では馴染みの少なかったしだれ桜の美しさに魅了されたのを鮮明に覚えています。それから3年半を過ごさせていただいた間には、大学院の修士課程がスタートを切り、様々な体験を重ねる中で京都大学が持つ“自由を尊び変革にチャレンジする大切さ”を学ぶことができました。在任中は皆様に大変お世話になり心より感謝しております。

昨年10月からは、「国立保健医療科学院」の公衆衛生看護部に部長として着任いたしました。国立保健医療科学院は、旧国立公衆衛生院、旧国立医療・病院管理研究所が統合して設立され、公衆衛生の実践活動の指導者・専門家の教育訓練と公衆衛生に関する調査研究を実施する厚生労働省の附属機関の一つです。科学院全体としては、年間約3000人の研修生を受け入れています。保健医療に関するサービスの質、特定検診の有効な活用方法、災害など地域の危機管理など国をあげて対応をしていく課題に関する様々な研究も行っています。

私自身の役割は、行政における保健師の管理者や中堅者を対象とした研修を企画・運営すること、行政保健師に関わる活動（たとえばメタボ検診の指導のあり方、保健師の地域診断）などに関する研究を行うこと、都道府県や政令市における行政保健師の研修に参加することなどです。大学での基礎教育に長年携わってきた私にとっては、中堅以上の保健師さん達を対象とした仕事なので、戸惑うことも多い日々を送っておりますが、過渡期

にある行政保健師さん方のサポートができるように取り組んでおります。最近、保健師管理者研修を担当し、素晴らしい現場のリーダーの方々と出会い、沢山学ばせていただきました。

少しの間だけ籍を置かせていただいただけなのに京大での経験は、不思議な位、私の支えとなっております。

そちらでは杉浦地域医療研究センターも完成し、ますます研究・教育の拠点としての基盤が整備されたと伺っております。京都という文化的な環境の中で皆様が、より一層のご活躍と、臨床家・教育者・研究者の世界的なリーダーを育成する場として充実・発展をされますことを願っております。



退職に際し

元看護科学コース 教授 江川 隆子

平成16年の4月から京都大学医学部保健学科に入職をし、5年間を無事に過ごすことができましたこと、医学研究科および人間健康科学専攻の皆様にご心からお礼申し上げます。

ある年齢がくると一日、一年が駆け足で過ぎるという感じがしますが、京都大学では私の望み道理の仕事をさせていただいてこともあって、あっという間であった感じがします。私の望みとは、旧帝大の一部局からでも＜看護診断＞の教育・研究を発信させるとともに、発信源になることを願いました。この件については、上司であった笹田学科長（前専攻長）の庇護の下、好きなようにさせていただき、しかし結果的には、その評価は種まき程度だったかもしれませんが頑張ってきました。実際には、看護診断（看護現象）は、京都大学医学部附属病院でも看護実践の中で活用されていますが、残念ながら看護診断に関する教育・研究は主に私が所属した生活習慣病看護学分野（臨床看護学）のみであり、基礎看護学分野や看護の各論といわれている小児や母性、地域等といった分野まで広げることができませんでした。

看護診断は、1973年からアメリカの看護理論家および実践者によって開発が進められてきたもので、現在200近くの看護診断名がNANDA-I（北米看護診断協会）から全世界に発信されて、看護師によって看護の専門性を高めるものとして活用されています。日本でも多くの施設で活用されているだけでなく、看護教育の中でも看護診断の看護における意義とその活用等が教授されています。欧米では、すでに看護診断に関することは、国家試験に導入されるとともに、実践では看護の評価の基準にも看護診断が取り入れられています。日本でもやっと、来年度から国家試験の中にもこの看護診断に関する問題が出されるとのことです。

看護診断がなぜ看護に必要なか、意義はどこにあるか議論が分かれるかもしれません。しかし、看

護の質の保証という点では、患者の必要とする看護、すなわち患者の健康上の看護問題（看護診断）を判断し、その判断に基づいて看護介入（看護治療、看護援助）をするということは看護にとっての1つの看護科学です。看護援助（介入）は、使い方もさまざまですが、看護診断が開発された現在では、看護診断に対する看護治療と、治療の看護援助（医療技術を用いて）と、日常生活等を援助する看護援助を総称あるいは包括して看護ケア（または看護援助）と呼んでいます。こうした看護ケアの中で、看護の独自性を明確に打ち出すことが可能であり、かつその援助（看護治療）の効果を、より鮮明に出すことが可能なのが「看護診断」であると考えます。

平成17年、日本看護協会の支援によって、「全国看護等社会保険連合」が創立されました。この連合の目的は、それぞれの看護分野における看護ケアの検証を奨励し、かつその結果を保険点数化への道を開こうとするものです。看護診断は、まさにこの連合が目的とする看護ケアの検証に的確に受け止めることができる看護分野です。

看護診断だけが学問として発展すればいいというものではありません。臨床で活用するためには、さらに看護診断は臨床検証をする時期にも来ています。さらに、各看護の専門分野における看護診断の抽出とその検証が不可欠になっています。それにもまして、それぞれの看護診断に対する看護治療（看護ケア）の開発と検証が重要な課題です。

したがって、看護学教育においてもこの看護診断（看護現象）の教育・研究は、今後の看護学の発展になくしてはならないものであると考えます。看護学修士や博士課程は、特にこうした看護診断の意義・意味を考えて教育・研究カリキュラムを考える必要があります。ぜひ、今後とも京都大学において看護診断に関する教育・研究が積極的に進められることを祈っております。



退職のご挨拶

元看護科学コース 教授 林 優 子

本年3月31日付けで京都大学大学院医学研究科人間健康科学専攻を退職いたしました。京都大学には、京都大学医療技術短期大学部が4年制大学として医学部保健学科に改組された学年進行の平成17年4月に着任し、本年3月末まで4年間お世話になりました。修士課程設置並びに博士課程の設置準備等、教育・研究機関として大きく変貌する時代の在職中の折には、教職員の皆様に教育・研究、管理運営についてご指導ご支援を賜りましたことを心より感謝申し上げます。

医学部保健学科に着任した当時、真っ先にみた京都大学のホームページのなかで、京都大学医療技術短期大学部および医学部保健学科が、医学部・医学研究科とは離れてその他の分類に位置付けられていたことが私にとって大変ショックだったことを思い出します。そのことを思い出したびに、医学部人間健康学科（保健学科）、医学研究科人間健康科学系専攻（修士課程・博士課程）が、今や京都大学医学部・医学研究科にしっかりと位置付けられたことを大変嬉しく思うと同時に、そのような発展は、前専攻長の笹田昌孝先生のカリスマ的リーダーシップがあったからこそだと思う昨今です。

私にとって京都大学の4年間は短期間ではありましたが、私の教育・研究的視野を拡大させるほど質的に学びの多い在任期間でした。兎にも角にも、モノ申す力と考える力を学びました。また、大きく変貌する教育・研究体制の流れのなかで教育・研究的視点はもとより、グローバルなものの見方や考え方を学びました。京都大学の学生たちの創造性豊かな発想に目を見張る思いをしたこともたびたびでした。また、京都大学の学際的な雰囲気、海外での研究発表、そして海外の臓器移植医療や看護を学ぶために出かけたドイツ心臓病センター、修士学生も同伴したメイヨークリニックやコロンビア大学、フロリダ大学への海外出張も視野を広げる大きな経験でした。何となく兼ねてから念願だった移植看護の学会を

発足させたことは大きな喜びでした。京都大学医学部附属病院と保健学科看護学専攻が先導しての日本移植・再生医療看護学会の誕生、これは保健学科の後押しがあってこそ誕生した学会であったと思います。本学会学術集会は今年で5回目を迎えるまでになりました。我が国における臓器移植医療はマイナーな医療であるために本学会は小規模な貧乏学会ではありますが、会員全員が志を高く持って努力しながら歩み続けています。

さて、現在、私は平成22年4月大阪医科大学看護学部の開設を目指して看護学部設置準備室で仕事をしています。本学は、最高の医療技術を保持しようとする意欲を有し、最善の医療を目指し創造性に富む良医の人材育成を行ってきた歴史ある医学の単科大学です。来年は医学部と看護学部の2学部になる予定です。私は本学の教育理念を継承して、「人の尊厳を守り、看護学に裏打ちされた看護実践教育を目的として良き看護職者を育成する」ために精進していきたいと思っています。看護学部が設置された来年には、4大学連携（京都大学、三重大学、滋賀医科大学、大阪医科大学）のがんプロフェッショナル養成プランにも参画させていただきたいと願っています。

最後に、私を育てて下さいました人間健康科学系専攻のますますのご発展と、人間の健康の創生という人間健康科学の構築を目指して大きく飛躍されますことを心より願っております。

私は、現在、勤務地の高槻市まで京都河原町から阪急電車で通勤しています。勤務地の大阪、自宅のある京都と東京を駆け巡るにはまだまだ体力も必要のようです。そのための体力を維持しながら、京都大学で培った自由な学風を大切にしつつ、人のハートと知性に刺激を与えることができるように自分自身を磨いていきたいと思っています。今後とも一層のご支援ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。私の退職のご挨拶とさせていただきます。本当にありがとうございました。



思い出すままの十四年

元検査技術科学コース 教授 福田 善 弘

皆さんは新学期を迎えられ心新たに教育、研究さらには臨床に取り組んでおられることと思います。思えば昭和51年に赴任先の若狭にある公立小浜病院から第2内科（現在の内分泌代謝内科）に戻ってきて、この春の退職まで33年間この『3足のわらじ』を履き続けてきたように思います。しかし『3足のわらじ』の比率はその時々により異なり、第2内科時代は教育の義務は比較的少なく研究、臨床に没頭することができました。

平成7年9月に前身の医療技術短期大学部（衛生技術学科）にうつってきました。以来、13年半お世話になりました。ここでは教育が中心となり2回生、3回生に臨床検査総論、臨床免疫学を担当しました。医学部では自分の専門領域のみの講義で（ポリクリなどは別として）年間2～4コマをこなしておれば良かったのでした。そのためこちらにきて教科書、講義プリント等の準備など戸惑う事が多かったのを覚えています。

臨床検査総論では適当な教科書がなく、多くは昔の検査法の原理的なものが中心であったため、現在の検査室の現場とのギャップを説明するのに苦労しました。それと共に、将来検査技師になったときに、単に与えられた仕事をこなすだけではなく、検査のプロとして絶えず新しい検査法の開発等を目指すようにとエンカレッジするようにつとめました。

臨床免疫学（4年生に移行した時に名称を変更して良いとの事でしたのでもう少し幅広くという意味で生体応答解析学としました）についてはまず『免疫は難しい』、『言葉が難解』、『略号が多い』等、最初からアレルギーを示す学生が多く少しずつ落ちこぼれが出ました。また日々新しい事が積み重なっていくので授業に出ないとさらについていけないという悪循環に陥っていくのでした。従ってまず出席させる事が大事と出欠を取ることにしました。学生にアンケートをとってみますと『範囲が広すぎてどこが重要で、どこを勉強したら良いのか判らない』との意見が多かったので授業に出ればその辺りがよく判るようにしました。一方、この領域は日進月歩で京都大学からも次々と新しい研究結果が新聞等にも掲載されましたの

で、それらを紹介するとともに京都大学にはいかにすばらしい先生が集まっておられるかについて話をしました。また実際にそのような先生に特別講義として最先端の話をしてもらいました。そのうち学生達も他の内科学や病気について勉強するにつれて免疫学に興味をわくようになってくれました。中には実習見学やゼミを紹介して欲しいとの希望もありましたのでかなえてあげるようにしました。学生時代に先生の免疫学に興味を持ちその研究にすすんでいますとってくれる事もあり教師冥利に尽きます。

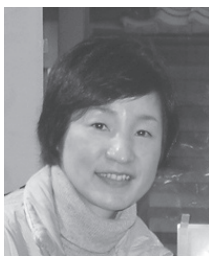
また以前には学科で学生達との食事会がもう少し多かったように思います。私も未だ若かったので学生達と2次会やカラオケに良く行ったものでした。

現在は学科（今ではコース）の壁は少しずつ取りのぞかれつつありますが、以前は何かと溝があり縄張り争いのような感もありました。

講義にしても看護学科と衛生技術学科で同じような講義があり看護学の中井先生が消化器疾患、私が内分泌疾患とそれぞれ専門外の講義を受け持つというねじれの状態がありました。

4年生、大学院とますます講義内容が増え、一方では非常勤講師の削減と大変な状況下にあります。根本は教員の不足にありますが直ちにそれが解決するとは思えません。医学科では当たり前のようになっていますが、それぞれの専門の領域の先生ができるだけシェアせざるを得ないのかもしれないかもしれません。いずれにしても医師も教員も受難の時代になってきました。経済のみならず世の中全体にゆとりがなくなってしまう、疲弊感がただよっている今日このごろ、皆さんには申し訳ありませんが良い時にリタイアしてよかったと思っています。

最後に、残念な事は内科病棟の東山よりに数本のユリの大木がありましたが病棟新築の際に切り取られてしまいました。また今度は本校のシンボルマークであった中庭の2本のユリの木が耐震、新築工事の際に切り取られなくなってしまった事を残念に思っているのは私だけでしょうか？



退任の挨拶

元看護科学コース 准教授 星 野 明 子

京都大学では、5年5ヶ月間（平成16年4月～平成21年9月）、看護学教育と研究に携わり貴重な経験をさせて戴きました。在職中は、京都大学の自由な校風に浸り、伸び伸びと過ごすことができました。また、在職期間中に、保健学科の1・2期生の卒業を見送り、博士前後期課程の設立をみることができましたことは喜びです。

地域看護学は、今後の社会に求められる保健師を育てる分野として、社会的な期待と役割が高まっており、その教育の質が問われているところです。昨年の保助看法の改正と文科省の「大学における看護系人材養成のあり方に関する検討会」の報告により、大学での保健師教育は選択制も含めて自由に選べるようになりました。今後の指定規則の科目単位数の改正をにらんで、教育現場での検討が求められます。

現在、京都府内では4大学と1専門学校による4年制の教育を実施しており、各大学とも地域看護学実習の施設と日数を確保するために努力し工夫を重ねている現状です。一方で、少子化対策としての大学の生き残りをかけた看護学科設立の動きも多くみられ、来年度以降はさらに複数の看護系大学が設置されると聞きます。それに伴い実習施設の確保がますます困難になることが予想されます。特に保健師教育の礎である行政における公衆衛生看護学の実習環境は限られています。昨年11月に、京都大学の呼びかけで府内4大学1専門学校の地域看護学実習に関わる教員と実習受け入れ先の京都府、京都市が一堂に会し、継続して検討する場が設けられました。社会に求められる保健師を育てるための教育の質をどのように担保していくのかについての模索が続きます。

さて、私の近況ですが、昨年の10月より鴨川を挟んだ西向かいの京都府立医科大学医学部看護

学科・保健看護研究科での教育と研究に携わっています。看護学舎は、西隣に梨木神社と御所があるためか、とても静かで落ち着いた環境です。京都大学での経験を生かして、微力ではありますが新転地で努力したいと思います。

末筆ではありますが、これまでの教職員の方々のお力添えに対して、心より深謝いたしますとともに、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。



退任徒然草

元リハビリテーション科学コース（理学療法学講座）
准教授 笠原 勝 幸

私も今年3月で定年退職の歳を迎えました。長い年月、多くの教官および職員の皆様のご援助のおかげで、痛風や胃潰瘍（+ピロリ菌感染症）と戦いながらもこの歳まで何とか、Obligationを果たして来られたことを深く感謝し御礼申しあげます。そして、この間、心にとまったことを述べさせて頂きたいと存じます。

1) サイの河原

1 ツ積んではまた崩し……

医療短大から4年制大学になるまでの過程は長く険しい道でした。毎年のように業績集を作成し、履歴書を更新し、授業・研究計画も改訂して文部省への申請書類を全教官が作成し提出します。そして、その結果は「今年もダメでした」の一言で終わり、新年度になるとまた始めから作りなおしです。「1 ツ積んではまた崩し……まるでサイの河原ですねー」（賽の河原＝三途の川の河原：死んだ子供が父母の供養のため小石を積んで塔を作るが絶えず鬼に崩される。地藏菩薩が現れ救うという。）このようなことが、10年以上も続きました。国立医療短大24校の最後にやっと4年制大学となったのは5年前でした。

2) ホワイト・クリスマス

12月24日午後10時すぎ……

野村先生が委員長を勤められた（昨年の広報でも触れられていました）大学自己点検書の作成も膨大な作業と時間を要しました。文部省の指示で4年制大学になるための作業と全教官が作成し私も委員として何回も会議と論述作業を繰り返し、締め切り日もギリギリの12月24日、昼から始まった編集点検が午後10時すぎにやっと終了しました。ホットして会議室（当時1階）から外を見る

と20cmも新雪が積もっていました。「ホワイト・クリスマスですねー」5人の委員全員で呆然とし、完成の安堵とともにしばらくの間、黙って眺めていました。私は車をおいて京阪電車で帰宅しましたが、自動車を雪中に運転して帰られた勇気のある先生もおられました。

3) テイキョー科目とシンドラ

就職のために健康・医療系の単位が必要なんです……

4年制大学になり、私は総合教育（前の一般教育）に所属していたため提供科目として健康運動学と人間発達学を他学部の学生にも提供することになりました。リハ専攻の人には国家試験科目ともなり、膨大な解剖・神経生理学的事項を記憶理解してもらわねばなりません。他方、教育機構からは「文系の学生にもわかりやすくして多数参加できるように」と厳命されます。また、教室では工学部、法経学部の学生から「就職のために健康・医療系の単位が必要なんです。」「大学院進学のため、ナニトゾ優の点数を」と泣きつかれます。そこで次のような方法でおこないました。ワイド黒板（総人の教室は黒板と白墨です）全面に板書した講義内容を中心に10分間リポートを作成・提出させ、これで出席を確認するものです。8割以上の出席で単位取得とし、試験点数と合わせて秀、優としました。この結果保健学科の40人に加えて100人程度の他学部の学生にも単位を出してきました。あたかも、ユダヤ人難民の大群を前にしたシンドラのような心境で、良い点数で合格点のリストを作成したものでした。

4) 防空壕生活と放浪記

朝は総人、昼は楽友・教育センター……

平成19年3月、寄付による新棟建設に加えて、十数億円の耐震工事の予算が地震学権威の尾池和夫総長と北徹副学長（循環器内科学教授兼任）の御尽力により認められ、全員による引っ越し、仮住まいの生活が始まりました。工事中はもとの北棟（今の中棟）が昭和57年建築で耐震基準を満たしていたため教官全員の居住空間となりました。私たちは旧会議室を8人で分画し、大学院生7名の机も確保しつつ、本棚、ロッカーで区画し、避難生活を始めたのです。窓が無く、穴蔵にすむようで、卓上の照明器具を購入しやっと本が読めました。のちに感想を聞かれて、「まるで映画で見る防空壕生活のようでした」と答え周囲の人たちから、本当に防空壕のようだったと、おおいに同意を得ました。また、前期、後期を通じて教室を確保するのが困難で、一条通り時計台前の総人の教室、医学部病院内の臨床講堂、近衛通りの楽友会館、聖護院通りの教育センターと教務が苦労して見つけてくれた場所を学生とともに放浪しながら講義をする一年でした。

5) 労咳騒動記

心配しましたが杞憂でした……

突然、中央棟2階の感染制御室から呼び出しがありました。腫瘍外来で診察した滋賀県からの紹介患者の胸部X線像に異常があり、転移を疑い呼吸器内科に対診を依頼したところ肺結核だったというものです。他のスタッフ7名とともに最初の胸部X線、採血、ツベルクリンなどの検査を行い、私は擬陽性といわれて3年間は半年ごとに検査を受けました。2回目からはすべて陰性で予定の検査を終えることができました。病理学教室で4年間の大学院生活を送っていたとき、結核患者の病理解剖で同僚医師の1人は肺結核となり1年間休学、もう1人は結核性頸部リンパ節炎で手術と6月間の抗結核薬治療となったことを思い出しても心配しましたが、杞憂に終わりホットしました。今では京都大学附属病院の完璧な感染制

御体制に感謝しています。

6) 新教育棟

医短は遠くなりにはけり……

平成20年4月、耐震工事が完成し、改装なった新しい校舎で講義を行うこととなりました。今までの5階の大講義室にはAV機器が無かったので、1階事務室前にあったやぐらに乗った大きなプロジェクターをゴロゴロと押して5階まで運び、映像を用いて講義を行ってきました。しかし、20年4月からは全講義室に同じ機種のAV機器が設置され、とても操作しやすく、学生にも好評で大変幸せに1年間の授業をさせて頂きました。学部2回生の授業評価でも運動学がとても良い評価を頂き、「ビデオがとても分かりやすく良かった」とのことでした。20年12月の人間発達学の講義中のことです。総合人間学部1回生の女子学生がテンカン発作をおこして倒れました。呼吸も脈拍も正常ですので「少し眠っているだけです」と周囲に集まった学生達を静めて、自発呼吸と心機能の確認の方法を説明している間に5分間位経過し、女子学生はパッチリと目を開いてくれました。誰かが連絡して教務の方が車いすを押して現れ、安静できる畳のある実習室に運び無事回復されました。ああ、医療短大にはあったベッドのある救護室はもう無いんだ。新教育棟になって無くなった物もあるんだと、その時始めて感慨を覚えたのでした。



退職のご挨拶

元看護科学コース 講師 渡 邊 浩 子

2009年7月31日付けで京都大学大学院医学研究科人間健康科学専攻を退職いたしました。京都大学には、2年4カ月と短い期間でありましたが、在職中は多くの先生方にご厚情賜り、心より深く感謝申し上げます。

私にとって京都大学で過ごした日々は、看護教育に携わる教育・研究者として備えておくべき資質を学んだ貴重な時間であったと考えております。振り返ってみますと、教育経験・研究経験の浅い私は、講義、実習、ゼミ等を通して学生さんから多くのことを学ばせて頂きました。発想の豊かさ、高い基礎学力、論理的思考能力を兼ね備えている優秀な学部生・大学院生さんとの交流はとても楽しく、私自身が成長させられるものでした。近い将来、看護界で活躍されるかと思うと頼もしく思えます。看護科学専攻の先生方からは、教育・研究の視点をはじめとし、知的好奇心を常に持ち、自己研鑽することの大切さを教えられました。また、他専攻の先生方からは、廊下に掲示されている研究成果を通して、研究の意義、研究手法、研究成果の導き方、発表方法を学ばせて頂きました。グローバルに活躍させている先生方の研究成果を見聞きする貴重な機会を得、自分の視野の狭さ、発想の貧困さを痛感し、強化すべき点を教えられました。よき師に巡り合えたことは、何よりの財産となっております。

現在、隣県の滋賀医科大学医学部看護学科で勤務をさせて頂いております。こちらは京都大学とは比較にならない程こじんまりした医学の単科大学です。しかし、こじんまりした大学だからこそその利点もあり、基礎医学科、臨床医学科、看護学科、病院が廊下1つでつながっており、相互の教育・研究を融合させ共同成果を臨床に応用するシステムが構築されています。そのメンバーの一員

に加えさせて頂いただけに、近い将来、臨床に還元できる研究ができればと考えております。

私が携わっている助産師教育は、現在、変革の期にあります。学部を選択教育から、高度な助産診断技術を習得する大学院教育化へと移行が進められています。産科医と同様に、県内での助産師不足も加速しています。そのため、地域に根差して活動してもらえる助産師を養成することが私に課せられた任務です。講義・実習等を通して助産師の魅力を語り、1人でも多くの学生さんが助産師の道を志してもらえるよう、努力してまいりたいと考えております。

京都大学大学院人間健康科学専攻は博士課程の開設、杉浦地域医療センターの開設と、ますます日本の教育・研究の拠点となって発展されることと思います。人間健康科学の構築を目指して大きく飛躍されますことを心より願っております。私自身も、もうしばらくこの地に住み、滋賀県の看護の発展のために微力ではありますが力を注ぐ所存でございます。今後とも一層のご支援ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



大変お世話になりました

元看護科学コース 助教 鈴木 麻 揚

京都大学では2年間勤務をさせていただきました。短い期間ではございましたが、中身のつまつた充実した2年間でした。

私がこの2年間で得た大きな財産のひとつは、尊敬できる上司、先生方との出会いです。いつもあたたかく、大きな懷で私のことを見守り、ご支援してくださった先生方の存在はとてありがたく、私はしっかりと教育と研究活動に励むことができました。またそのような上司の先生方の姿は、自分も先生方のような「大きな」人になりたいと、私の将来像を作ってくださいました。

もうひとつの大きな財産は、同僚の先生方の存在です。楽しくそしていきいきと2年間で過ごせたのは、励まし合いそして助け合う、すばらしい同僚の先生方がいらっしゃったからだと思います。時には「看護」について語り、また時には論文の書き方について一緒に考えてくださり、ぐちや冗談をいいながらいつも支えてくださった同僚の先生方の存在は、とても大きなものでした。

京都大学での教育、研究活動は、修士課程をはじめ、「開拓」していかなければいけないことがたくさんありました。そのような時に助けていただいたのは、事務の職員の皆様です。施設との調整や研究や実習の手続きはじめ、出てきた問題をひとつひとつ丁寧に解決していかなければいけないことがたくさんありました。その時にたくさんお力を貸してくださいました事務の職員の皆様にも感謝の気持ちでいっぱいです。

京都大学で私が新しく経験させていただきましたのは、他領域の先生方との教育研究活動です。以前勤めておりました大学では、主に精神看護だけを担当しておりました。京都大学では、臨床看護学講座という大きな講座に属し、臨床基礎、成人慢性期、成人急性期の先生方と一緒に教育と研

究をさせていただきました。ちがう領域での実習指導や研究活動は、看護について新しい視点を私に与えてくれ、私が思う「看護」というものをより柔軟で、強く、しなやかなものにしてくれました。

この度関西をはなれ、関東に移ることとなりましたが、離れていても尊敬する先生方の存在はいつも私を励ましてくださっています。場所は離れてしまいますが、同じ保健医療福祉に携わっておりますため、またご指導をいただく機会がありますことを願っております。

最後に、人間健康科学系専攻皆様のご多幸そして今後益々のご発展を心よりお祈り申し上げます。



退職のご挨拶

元看護科学コース 助教 高橋 美和

このたび、3月31日をもって、京都大学大学院医学研究科を退職しました。

3年弱と短い期間ではありましたが、在職中は、多くの先生方、事務の方々、実習先の医学部付属病院のスタッフの皆様、本当に多くの方々にご厚情賜り、本当にありがとうございました。心より深く感謝申し上げます。

今、思い返せば、私の人生において京都での生活は、初めての関西進出でした。関東での生活が長かったため、恩師からの「箱根の山（関所）は絶対に超えてはならない」とのアドバイスに背く形での着任でした。結果は、アドバイス通り京都独特の地名、方角に苦労し、関東と関西の文化の違いに翻弄され、当初は少し後悔しながら京都生活をスタートしたことを今では、懐かしく思い出されます。

京都、関西の文化に適應するのに時間を要し、せっかく観光・歴史の町、古都京都に住んでいたにも関わらず、遺産・歴史好きな私にとって観光巡りを十分、堪能していない事に気付き、今では、あそこも行っておけば良かった、大変惜しい事をした、と京都の名所巡りの観光番組があれば、後悔しながらテレビを観ています。

3年足らずの京都生活ではありましたが、思い出は数多くあります。ちょうど私が在職していた時を同じくして京都大学医学部保健学科にとっては、転換期の多忙な時期でした。保健学科の立ち上げから完成年度を待たずしての大学院修士課程設置、そして今春からは、博士課程まで、と一気に駆け上った時期でした。また、加えて校舎は、耐震改修に伴い、とにかく引越し三昧の生活を送っておりました。このような多忙な時期を京都大学で過ごした事は、大変印象深く記憶に残ると思います。

仕事の面では、それまでの私は、教職に就いていながらも研究活動に余り積極的ではありませんでした。その私が、京都大学に着任して、その意義と必要性を痛感させて頂きました。そして、数多くの学会、シンポジウム、研究会に参加する機会を頂き、とても貴重な体験をさせて頂きました。それらの活動、研究会等を通じて、経験とネットワーク、人脈、視野を広げられた事は私にとって一生の宝物です。人生において、短期間でも、このような素晴らしい環境に身を置く事ができたことを、心より感謝し、幸せに思っております。また、当初感じていた違和感や戸惑いながらも、ここまでやってこられたのは、本当に周囲の方々のお陰だと思っております。特に同期、同僚には本当に恵まれ、温かく見守られ、助けられたお陰だと、今更ながらつくづく思います。本当に心より御礼申し上げます。

最後になりましたが、京都大学で、教育・研究活動に携わることができたことは、今後の私の教員生活において、一生の財産になりました。今後、教育に携わる者として、21世紀の看護・保健界における臨床家、教育者、研究者の育成を担うべく、京都大学で学んだことを忘れずに、大切に活かし、教育・研究者として、さらに成長し努力したいと思います。これは、少しでも成長することが、京都大学に在職し、学ばせて頂き、支えて頂いた方へのご恩返しだと思います。

改めまして、今後とも、変わらずご指導ご鞭撻賜りますようお願い申し上げます。

末筆ながら、皆様方のご健勝と、人間健康科学系専攻のさらなるご発展を心から祈念申し上げ、御礼かたがた、ご挨拶とさせていただきます。

退職のご挨拶

元看護科学コース 助教 澄川 真珠子

平成21年9月末をもちまして退職致しました看護学専攻生活習慣病看護学分野助教の澄川真珠子です。在職中は多くの教職員の皆様、京大病院のスタッフの皆様には格別のご懇情を賜り厚く御礼申し上げます。夫の転勤に伴い、年度途中での退職となり、皆様には大変ご迷惑をおかけし大変申し訳ございませんでした。

私は京都大学において初めての教員生活をスタートさせました。大学院時代よりご指導いただいた現関西看護医療大学看護学部教授の江川隆子先生、現滋賀県立大学看護学部教授の奥津文子先生をはじめ、多くの教職員の方々に支えていただき、教員として教育、研究の第一歩を踏み出すことができ、毎日がとても新鮮な日々でした。特に江川先生、奥津先生には、看護学を科学的に捉える視点を学ばせていただき、それを学生に伝える両先生の熱い思いから、教育というものの楽しさを実感することができました。また、研究活動につきましても、多くのご助言をいただきました。平成21年度よりは、生活習慣病看護学分野教授の細田公則先生、同分野准教授の本田育美先生がご着任され、また新たな教育や研究の視点を学ばせていただき、とても充実した3年半を過ごさせていただきました。大学院時代より糖尿病患者におけるセルフケア行動やフットケアに関する研究を継続しており、京都大学という最先端の環境の場で取り組めたことは私の人生の大きな財産となりました。さらに、私の過ごさせていただいた京都大学は変革の時期であり、修士課程、博士課程の立ち上げや、耐震改修工事にともなう移転などとても貴重な体験をさせていただきました。

さて、私の近況ではございますが、平成21年10月より、島根大学医学部看護学科の非常勤講師として、看護学生の実習指導に携わっておりま

す。また、幸いにも本年4月より、講師として着任することになりました。これまで京都大学で培ったものを土台にして、自分を鍛えなおすつもりで新しい職場で一から頑張る所存でございます。今後ともお尽力賜りますよう、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、京都大学大学院人間健康科学系専攻の皆様がますますのご活躍と、研究教育機関としてのより良い充実をお祈り申し上げ略儀ながら書中をもってご挨拶とさせていただきます。本当にお世話になりありがとうございました。



着任のご挨拶

看護科学コース 教授 細田 公則

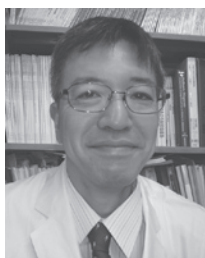
平成20年7月1日付けで看護科学コース臨床看護学講座生活習慣病看護分野教授として着任しましたので、ご挨拶申し上げます。

私は糖尿病、肥満症、メタボリック症候群を専門として、分子レベルの視点から、全身をトータルに捉える視点まで、幅広い角度で考える内分泌代謝内科学の立場で、研究、臨床、教育を行ってきました。全身の病態生理を分子生物学的手法により分子レベルで科学的に捉え、臨床応用を目指した診断法と治療法の研究を目指してきました。糖尿病、肥満症、メタボリック症候群は日本人の死因の約3分の1を占める心血管系疾患の主要な成因の一部となっており、また網膜症、腎症、神経障害などの糖尿病細小血管症、睡眠時無呼吸症候群、変形性関節症、脂肪肝など全身合併症の成因となり、医療において重要な分野です。糖尿病、肥満症、メタボリック症候群はライフスタイルの変化とともに世界的に増加し続ける common disease であり、人間健康科学において重要な位置を占めます。私は自分の内分泌代謝内科学の基盤を生かして、人間健康科学の教育と研究にあたる所存です。

私は京都市山科区で生まれ育って、地元の公立中学から岩倉の同志社高校を経て、京都大学医学部、京大病院と国立京都病院（現京都医療センター）で研修、京大の内科の大学院、2年半米国テキサス大学サウスウエスタンメディカルセンターハワードヒューズ医学研究所、京大人間・環境学研究科助手、京都大学医学研究科内分泌代謝内科学助教、講師、附属病院内分泌代謝内科病棟医長などをやってきました。人間健康科学系に来るまでの活動は、京大病院と北山の武田病院グループ城北病院で糖尿病、肥満、メタボリック症候群の患者さんを診療しつつ、若手の助教、ポス

ドク、大学院生、研修医、学生を指導しつつ、糖尿病、肥満、内分泌代謝学の領域で分子生物学、トランスジェニックマウスなどの発生工学、iPS細胞などの再生医学、糖尿病肥満の治療薬の創薬、内臓脂肪測定の新規医療機器の開発などを同時に幅広くやってきました。これまでの活動では、京大病院、医学研究科、京都大阪の製薬会社、医療機器会社、関連病院の多くの方々にお世話になってきました。

1978年頃から京大の近衛界限にずっと居りますが、京都大学は研究、教育、臨床を行うのに非常に恵まれた場であると感謝しています。今までお世話になった方々とのネットワークを生かしながら、人間健康科学系の中で、皆様にお世話になりながら、新たな人間健康科学、看護科学の発展に微力ながら尽くしたいと考えています。面白い領域や社会的ニーズの高い領域については、新規の分野や異分野でもどんどん前向きに取り組むようにしたいと考えています。よろしくお願いします。



血液学の楽しさを教える

検査技術科学コース 教授 足立 壯 一

平成21年4月1日付で、笹田昌孝教授の後任として、京都大学小児科から着任いたしましたので、ご挨拶申し上げます。笹田先生の担当されていた血液学、血液検査学、血液検査実習、感染防御学に加えて、小児科学の授業も担当させていただいていますのでよろしくお願いいたします。私は血液腫瘍専門医として、学生たちに、血液学の楽しさ、おもしろさを伝えていきたいと思っています。小児白血病・悪性リンパ腫患者の治療は日本小児白血病リンパ腫研究グループ（JPLSG）による多施設共同臨床試験により、行われています。現在、全国の急性骨髄性白血病（AML）の骨髄標本が東海大学に集められ、医師、検査技師によるセントラルレビューが行われ、治療が行われています。私は、京都大学附属病院の検査技師の方々の協力を得て、将来の小児血液セントラルレビューのできる多くの若い血液検査技師を育てたいと考えています。また、造血細胞移植責任医師として、チーム医療の重要性は痛感してまいりましたので、検査技師だけでなく、看護師、理学療法士、作業療法士を目指す学生たちの授業でも、情熱を持って、学生の指導を行ってまいり所存です。

また、研究面においては、小児がん・白血病の遺伝子診断、予後因子の研究は、新薬の開発など、難治性疾患の新規治療開発につながる最も重要な研究ですが、欧米に比べて日本の現状は厳しいものがあります。人間健康科学科では後期博士課程が開設されました。私は小児科の大学院生時代に久保田優先生（現；奈良女子大学教授）から研究の楽しさを教わり、アメリカから京大小児科に帰国してからも、細胞死を始めとする研究を多くの大学院生と共にやってまいりました。今年はJPLSGのAML委員会委員長として、人間健康

科学科の学生たちと臨床に役立つ研究を地道にしたいと思っています。現在も、私は京大病院で、血液外来を含む、週2回の小児科外来、毎週の血液腫瘍患者さんの回診と移植責任医師を継続させていただいております。4月からは、菅沼教授と共に造血細胞移植後の女性の長期フォローアップ外来も始めさせていただくことになりました。臨床、研究、教育において、多くの先生方とともに頑張っていきたいと存じますので、よろしくお願い申し上げます。



新たな飛躍を目指して

検査技術科学コース 教授 中 泉 明 彦

平成21年4月1日付けで着任しました。どうか宜しくお願い致します。

私は、愛知県東加茂郡（現豊田市）松平町で生まれ、地元の小学校でのんびりと育ちました。愛知教育大学附属岡崎中学校に進み、バレーボール部で終生の友人ができました。東京の小平市にある創価高校に入り友人先輩後輩と寮生活を送り、創立者池田大作先生の指導激励で「英知を磨くは何のため」と常に自己に問いかけて生きる姿勢を学びました。東京大学理学部物理学科を卒業後、同大学院理学研究科に進み、物性研究所の大野和男教授のもとで超低温物性の実験をしました。「断熱消磁」という方法で、熱エネルギーをエントロピーのエネルギーに変換して20マイクロケルビンまで温度を下げ、世界最低温度を達成し、ギネスブックにも載りました。「金の超電導」のテーマで修士号を取得後、物理学の研究者として生きるかどうか悩んだ末、ダイレクトに人に貢献できる医師になろうと決意し、大阪大学医学部に学士入学しました。卒業後内科医となり、1年間大阪大学附属病院・1年間大阪市内の愛染橋病院で研修し、以後22年間大阪府立成人病センターで、主に膵・胆道疾患の診療を行ってきました。前半11年間は同センター研究所に所属し竜田正晴部長（後に病院長）のもとでラットやハムスターをもちいた肝膵発癌抑制実験も行い、後半11年間は田中幸子検診部長のもとで膵癌の高危険群の解明と早期診断をめざした膵癌検診にも携わりました。私の仕事の中心テーマである膵癌の早期診断達成のために、腹部超音波検査、胆膵内視鏡検査、細胞診断に携わり、すぐれた超音波検査士、細胞検査士とともに臨床・研究をおこなってきたことや平成12年から5年間大阪府立成人病センター細胞検査士養成所校長を兼務したことなどが、検

査技術科学コース教授選に応募することになった契機でもあります。レベルの高い、正確、迅速、安全な検査・診断・治療の実現のためには、優秀な臨床検査技師や看護師、理学・作業療法士などの医療スタッフとのチーム医療が必須であり、教育による人材育成が医療へのより大きな貢献につながると考え、人間健康科学科に参りました。

9月からは京大病院消化器内科千葉勉教授の御配慮で外来も始めましたので、超音波、内視鏡、細胞診にも携わり、臨床に役立つ研究をめざしたいと考えています。更に検査技術科学コース内での医工連携研究を目指すと共に、看護、リハビリの先生方との共同研究、京都大学研究施設、大阪府立成人病センター研究所との共同研究も立ち上げたいと願っています。



新任挨拶

近未来型人間健康科学融合ユニット

教授 荒井 秀 典

平成21年4月1日付けで医学研究科人間健康科学系専攻 近未来型人間健康科学融合ユニット教授を拝命いたしましたので、皆様にご挨拶申し上げます。

私は昭和59年京都大学医学部を卒業し、大学病院での内科研修の後、島田市立島田市民病院において内科全般に関する研修を2年間行いました。その間、虚血性心疾患、脳梗塞、閉塞性動脈硬化症などの血管疾患を持つ多くの症例を経験し、動脈硬化性疾患の重要性を認識いたしました。その経験からこれら疾患の根底にある動脈硬化発症に関わるメカニズムを解明したいと思い、大学院に入学しました。大学院においては北徹教授のご指導のもと動脈硬化の発症メカニズムの解明に向けてマクロファージ、内皮細胞における脂質代謝に関する研究を行ってまいりました。その後カリフォルニア大学サンフランシスコ校へ留学する機会に恵まれ、Israel F Charo 教授のご指導のもとケモカインと血管生物学に関する研究を行ってまいりました。ケモカインは炎症と密接に関係する分子であり、帰国後は動脈硬化と炎症の関わり、メタボリックシンドロームと炎症の関わりについて基礎的な研究を行うとともに、日本人における脂質代謝異常についての疫学的研究をも行いました。臨床面では高脂血症、糖尿病、高血圧、骨粗鬆症などいわゆる生活習慣病、代謝疾患の診療を中心に行いつつ、高齢者の術前評価や高齢者総合的機能評価による全人的診療を行ってまいりました。今後は老年科医、代謝研究者として培った知識・ネットワークを生かして人間健康科学系専攻において地域医療・チーム医療に関する研究・教育にあたる所存です。

近未来型人間健康科学融合ユニットは人間健康科学系専攻博士課程の設置に伴い新設されたユ

ニットで、看護・検査技術・理学・作業療法各コース間のみならず、医・工連携や産官学連携の融合により、社会ニーズ、医療ニーズ、患者ニーズに応じたより実践的な医療システムの構築、機器開発、各種マネジメントに関する研究を行う部門であります。その研究により人間健康科学の発展に寄与し、社会へ向け情報活動を行うとともに、地域医療の現場で科学的根拠をもって提言ができ、多職種チーム内で中枢的指導性や統轄力を発揮できる医療専門職を育成したいと考えております。

浅学非才の身ですが、今後も教育、臨床、研究に精進を重ね、医学研究科人間健康科学系専攻において地域医療、チーム医療の場で活躍できるすぐれた人材の育成に努める所存でありますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



新任のご挨拶

リハビリテーション科学コース（理学療法学講座）
准教授 青山朋樹

平成21年4月1日より着任いたしましたのでご挨拶をさせていただきます。まず始めに私のバックグラウンドを紹介させていただきます。私は平成6年に群馬大学医学部を卒業し、同年に京都大学医学部附属病院整形外科に入局しました。以後、島根県の玉造厚生年金病院で慢性期疾患を、滋賀県の長浜市立病院で急性期疾患を経験させていただきました。平成12年には京都大学大学院に進学し、以後京都大学再生医科学研究所で研究を続けてまいりました。

いろいろな所に所属してみると、とても意外な事にこちらでは当たり前の事があちらでは通用しない、あちらでは非常に価値ある事がこちらでは普通の事であるという事に気がつきます。私は商人ではありませんがそれらをつないでみるととても大きな価値が生じる事はとても面白い事から、人間健康科学系専攻というヘテロなフィールドはとてもやり甲斐のある職場だと考えております。私は整形外科医という役割とリハビリテーション医という役割を持っておりますが、後者の立ち位置に関しては少し迷いもあります。これは私一人だけでなくリハ医の共通の悩みであり、「PT、OT、STの持つ素晴らしい技術の音の出し方を知り、引き出し、まとめる指揮者の役割」、「診療科と診療科あるいは社会の間の隙間を埋める役割」、「さまざまな患者さんのニーズをできる事、できない事に仕分ける役割」等々…きちんと説明できる人はおりません。このことについては自分の中でおいおい解決していくことにして、リハビリテーションはこれまで言葉で定義されていたような「復権の医学」だけでなく、「創造」や「成長」の医学であろうと考えています。このためには新しい評価の方法、治療技術手法を開発していきたいと思っています。

学生時代はスクールウォーズを見てラグビー部に入っていました。このため困難にぶつかっていく事は嫌いではありませんが、ラグビーそのものはとくに引退し、現在は園芸や自転車乗りを楽しんでおります。理屈っぽい長野県人で、几帳面なA型、坊主頭ですが家は寺ではありません。今後どうぞよろしくお願いします。

就任のご挨拶

近未来型人間健康科学融合ユニット
准教授 石 津 浩 一

平成20年4月1日付けをもちまして、本学大学院医学研究科放射線医学講座（画像診断学・核医学）より異動となり、近未来型人間健康科学融合ユニットに准教授として着任致しました。どうぞよろしくお願い致します。着任後、そろそろ1年になろうかと言うのに、未だ慣れないままでおりますが、徐々に新しい事を初めていければと考えています。

専門は画像診断で中枢神経系の核医学画像診断を主にやってきたのですが、最近のテーマは徐々に自動診断の分野に移ってきています。核医学手法を用いた画像診断は、FDG－PETを用いた腫瘍検索が近年臨床でのトピックスですが、各種臓器の解剖のみならず機能を画像化できる点に大きな特徴があり、その点でCTやMRとは大きく違っています。核医学手法を用いた多くの研究に携わってきましたが、患者さんの撮像を通して疾患特異性や臨床有用性を評価するといった臨床研究だけではなく、健常被験者に課題を与えてその間の脳機能の変化を見る高次脳機能や、脳内レセプターの分布や変化の観察など純粋に脳科学の領域まで多岐にわたります。同時に装置の性能向上といった工学的な側面からの機器開発メーカーとの共同研究や新規放射性医薬品の開発といった薬学的側面からの放射性医薬品メーカーとの共同研究も行ってきました。日立、東芝、島津、GE、Canon、富士フィルムといった大企業との共同研究が多いのも画像診断学の特徴かもしれません。

最近は画像診断のコンピュータによる自動化の研究も始めています。ここで用いられるデータマイニング手法は画像診断以外の血液検査データ等でも利用され始めていて、広い範囲で応用が可能だと考えられます。人間健康科学系専攻の修士課程や博士課程において、これまでの経験を生かし

つつ新しい手法を導入することで、これまでになく新たな研究を大学院生の皆さんと進めていけたらと思っています。微力ではありますが、人間健康科学系専攻の発展に寄与するべく頑張りますので、どうぞよろしくお願い致します。



新入職のご挨拶

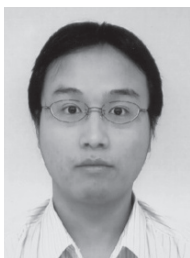
看護科学コース 助教 小西 奈美

平成20年10月、精神看護学助教として着任し早くも半年が過ぎました。着任早々実習から始まり、一か月前までは看護師として勤務していたため臨床での実習指導経験を駆使して過ごしていたのですが、それまでとは異なり、教員として対学生・対臨床という立場にならなければならず日々戸惑うことばかりでした。それでも臨床スタッフの方々から温かいご協力・ご指導をいただき、なんとか実習を乗り越えることができました。また、大学に戻ってからの業務もまだ慣れない新しいことばかりですが、周りの方々に支えていただき今日に至っております。

さて、私が精神看護学に興味を持ったのは看護学生の時の精神看護学実習でした。安定した地域生活を送るための社会資源の一つとして作業所がありますが、そこで出会った方たちについて考えたときに、自分の価値観と比べてしまい、理解することが困難だったことがこの分野に興味をもったきっかけでした。しかし最初の勤務先は小児科であり、そこでの仕事も今日の私の貴重かつ大切な経験ではありましたが、未熟な私にとっては精神看護とはほど遠いような日々を過ごしていたために、より精神看護への関心が高まりました。そして、修士課程へと進んだのですが、ティーチング・アシスタントとして学部頃の实習先の作業所に行く機会があり、学部生の私が記録したものが残っていたことに感激するとともに、考えることがそのころとほとんど変わっていないことに愕然としました。しかし、恥ずかしながら今でも学生の頃に抱いていた疑問をきちんと解決できているかどうかは確かではありません。さらに、実習指導を通して看護学生の頃の私と同じように解決を求め、本来中心となるべき当事者や自分を見失っていき、行き詰っていく学生と接する中で、

改めて初心に戻ることがあります。このような経過の中で、教育も研究もまだまだ初心者で迷走していますが、答えがあるようでない、科学的には説明することが困難な精神科看護の領域について、臨床での経験を生かして私なりに教育や研究を通して少しずつ追及していくことができればと思っています。そして、本学における看護以外の様々な専門領域と関わり連携できるというメリットを生かせるように、邁進し研磨していかなければならないと強く感じますし、微力ながら精神科看護・精神保健福祉に貢献できるように努めていきたいと考えています。

もうすぐ新年度を迎えますが、年度途中より着任致しましたので、準備をしながらも実際はどのようなことが待っているのか見当が付きません。ご迷惑をおかけすることがあると思いますが、今後ともご指導していただきますようよろしくお願いいたします。



着任のご挨拶

検査技術科学コース 特定助教 布 樹 輝

平成21年5月1日付けで、医学研究科・人間健康科学系専攻に着任いたしました。ご挨拶申し上げます。

私は、中国の湖南大学機能工学科を卒業後、企業においてマルチメディアに関する研究開発に2年間携わるうちに、人の能力をより直接的に支援できるマルチメディアの研究に興味をもち、新たなメディカル情報のセンシング、診断支援などの医療における高度ヒューマンインタフェース技術の研究の道に進みたいと思うようになりました。そこで、中国からの留学生として、半年間の筑波大学の研究生の後、大学院に入学し、椎名教授のもとで次世代メディカルインタフェースを中心とした生体医工学の研究に従事しています。そして、今年3月に筑波大学の工学博士学位を取得し、世界トップレベルの京都大学に就職できて、非常に幸運です。私は京都大学では超音波イメージングと光超音波イメージングについて研究をしています。

ある日、NHK スペシャル激流中国「病人大行列ー13億人の医療」というドキュメンタリー番組を見ました。市場経済化が加速する中国で政府が最も取り組まなければならない課題としているのが医療問題です。医療問題の中で私が最も注目しているのは診断装置遅れの問題です。現在、生体イメージング分野において世界の先端を行く日

本において、研究に携われることを幸運であると思う同時に、これまで身に着けた幅広い基礎知識と、この分野への高い研究意欲を推進力に、今後、優れた研究成果をあげることで、生体イメージング研究や教育の世界的拠点を確立していく上で貢献できるよう全力を尽くす所存です。

皆様のご指導を、何卒よろしくお願い致します。



就任のご挨拶 — 苔生す転石を目指して —

検査技術科学コース 特定助教 酒 井 晃 二

昨年10月1日付で検査科学技術専攻情報理工医療学講座にCKプロジェクト(Canonと京都大学による医工連携研究テクノハブプロジェクト)特定助教として着任いたしました。ご承知置き賜りますようよろしくお願いいたします。着任後数カ月を経過いたしました。これまで経験してきたカルチャーとの違いなどもあり、関係諸氏の皆様には迷惑をかけ通しではあります。本年は戦力となれるよう尽力しているところでありますので、引き続きのご指導を賜りますようお願い申し上げます。

本研究科は私にとりまして6か所めの職場になります。大学院を卒業して職業を得てから5回異動(3回の転職)してきたことになります。これまでに、化学薬剤を製造販売する企業、地方公務員として3か所、大学教員として2か所目というような転がり方をして参りました。企業では、タイヤ用老化防止剤の開発を行ってまいりました。その後、ご縁をいただき岩手県工業技術センター(全国の都道府県が設置する主に工業に関する研究機関)に転職いたしました。そこでは、化学部に籍を置き、化学検査、プラスチックリサイクルなどの研究に従事いたしました。その後、岩手県公害センター(環境測定、モニタリングを行う機関)、岩手県環境保健研究センター(公害モニタリングと保健衛生研究の機関)に異動し、主に環境モニタリングに従事いたしました。その後、再度のご縁をいただき、前任地として、本学の高等教育研究開発推進センターに転職いたしました。これまで全学教育および工学部電気電子工学専攻の教育および医用画像処理研究に携わって参りました。以上が私の簡略な職歴です。

俗に「転石苔を得ず」と申します。この言葉には良悪正反対の意味が込められています(苔に良

悪があります)。良い意味は、転がることにより悪い苔(悪習、融通の利かない体質など)が身に付かないということです。悪い意味は、転がることにより良い苔(習得に時間がかかる技術や知識・人脈など)が身につかないということになります。私自身は良い意味を意識して転がってきたつもりです。しかしながら、良い苔を身につけてきたつもりでも新たな場所では自分に足りない部分を明らかに意識させられるものであり、悪い方のこの言葉の意味も深く理解しなければならないと反省させられること暫しであります(これは転石の良い効果と考えることもできます)。

今後どのような転がり方をするのか私自身にも全く予測できかねますが、本研究科に在籍させていただいている間は、良い苔をびっしりと生やすよう心掛け、微力ではありますが本研究科の発展、教育・研究の進展に寄与できるよう尽力する所存です。関係諸氏の皆様にはご指導ご鞭撻をいただきますよう重ねてお願い申し上げます。



着任のご挨拶

看護科学コース 助手 福田 里 砂

平成20年10月1日付けで看護科学コースクリティカルケア看護学分野に着任いたしました。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

私は人間健康科学系専攻の前身である医療技術短期大学部看護学専攻を卒業後、保健師の道に進もうと思い、大阪大学に編入学をしました。しかし、編入の2年間、救急外来で非常勤看護師として勤務したことがきっかけで、クリティカルケア分野での経験を重ねたいと思い、看護師として就職することを決めました。救急外来での2年間は、地域の中規模病院だったこともあり、大学病院とは看護師に求められる仕事の違い、大学病院での実習経験しかない私にはカルチャーショックの毎日でしたが、大学病院では経験できない多くのことを経験させていただき、患者様が危機的状況にある中で、いかに的確に判断をし、行動するかという重要性を身を持って経験しました。

その後、京大病院の第二外科・心臓血管外科に勤務し、ここでは根拠をもって判断し、行動することを学ばせていただきました。しかし、看護の中には経験的に行っていることも多く、それに対して疑問を感じ始めたときに参加したEBNの研究をきっかけに研究について学びたいと思い、大学院へ進学、着任前まで大阪大学に在学しておりました。

自己紹介が長くなりましたが、着任してから半年、初めての教育という仕事に、目の前にあることをこなすだけであつという間の半年でした。今振り返ると反省すること多いですが、経験を重ね、少しずつでも成長していければと思います。本専攻には、看護師を目指すものだけでなく、様々な進路を志す学生も多く在籍しておりますが、看護学を通して、一人の人間として成長していけるような手助けができればと思っています。また、

将来の医療従事者となるにあたっては、日々の看護で得られる充実感や楽しさと同時に、その責任、厳しさも伝えられたらと考えております。

研究に関しては、大学院で修士・博士課程と研究をしていましたが、未だ自分のライフワークと言えるテーマには辿りついておらず、模索中です。看護師として自己紹介で述べさせていただいた経験以外にも、大学院在学中に、地域の病院で勤務しておりましたが、それらの経験を踏まえても救急医療の分野で研究を進めていければと考えております。

教育・研究のいずれにおいても、まだまだ未熟者ではありますが、多くの先生方のご支援をいただきながら、精一杯努力してまいりたいと思います。不慣れなことが多く、至らない点もあるかと存じますが、どうぞご指導の程よろしくお願い申し上げます。



着任のご挨拶

リハビリテーション科学コース 助手 山 田 実

リハビリテーション科学コース理学療法学講座の助手として、昨年の8月に着任して早1年4ヵ月を迎えます。「早」という言葉がそのまま当てはまるかのように、本当に猪突のような勢いで月日が流れました。着任前までは、臨床人としての、180°変化した大学人としての生活と、京都という不慣れな土地に戸惑いばかり感じながら過ごしてきました。

私の出身は京都の隣の兵庫になります。恥ずかしながら、本学に着任するまでに京都を訪れたことはほとんどなく、片手で数えられる程度でした。ですので、四条や九条などと言われても、北へ行けばよいのか、それとも南へ行けばよいのか……という状況でした。最近になって、ようやく「川端丸太」や「四条烏丸」などが把握でき、似非京都人を気取っております。

さて、私は「高齢者の転倒を科学する」そして「高齢者の転倒を予防する」ということを目標に研究を行っております。「臨床で学んだことを、地域の高齢者に還元しよう」と大学近辺に在住の高齢者の方々に対して張り切って転倒予防体操を実施しておりますが、実際には「地域の高齢者からもさらに学ぶ……」という結果になっています……。私は、学会発表や論文などで公表される研究の情報は氷山の一角であり、公表されている情報の背後には「論文を読んだり、学会での発表を聞いたりしても分からない研究者の裏話」や「その研究をしたことのある人にしかわからない苦労話」など、実に多くの情報が控えているものと思っています。また、研究者にとっては、このような情報も非常に重要であり、研究を行う上では欠かせないものです。私も、研究のフィールドを提供していただいているデイサービスセンターでは、「歌を歌い」、「ダンスを踊り」、「ゲームに参加」

するなどしながらセンターとの繋がりや高齢者との関係などを強化しております。また、このような経験から、「本当に高齢者が困っていることって何だろう?」、「センターのスタッフが求めていることは何だろう?」ということを考えて研究に活かすようにしています。

私が京都に来て変わったことは、臨床人から大学人になったことでなく、高齢者に本当に役立つ研究を求めるようになったことだと思います。このような視点での研究および学生教育を継続することで、高齢社会の担い手になれるよう精進していきたいです。

特別企画：What is Health ? —トップアスリートに聞く—

トップアスリートは「健康」をどのように認識しているのでしょうか。スピードスケートショートトラック種目で日本代表としてご活躍中の寺尾悟選手に取材させて頂き、その「強さ」の秘密を探りました。なお、本取材は、オリンピック代表最終選考選手権の4日前（09.12.15）に行いました。

インタビュアー：看護科学コース 助教 久保田正和
リハビリテーション科学コース 助教 白井はる奈

寺尾 悟（Terao Satoru）34歳 トヨタ自動車 所属

18歳の時、冬季オリンピック（1994年リレハンメル）に初出場、1000mで見事4位入賞。以来冬季オリンピック4大会（1998年長野・2002年ソルトレイク・2006年トリノ）連続出場の快挙を成し遂げる。また、全日本選手権では12回の優勝、世界選手権でも金メダルを獲得するなど、日本のショートトラック界を牽引してきた。2009年2月、足関節を骨折し、2ヶ月間の入院生活を送る。ケガとの闘いを乗り越え、同年12月、冬季オリンピックバンクーバー大会最終選考選手権に出場。今回、惜しくも五輪代表を逃したが、後進の育成に夢を託し、新たな第一歩を踏み出している。



スケートを始めたきっかけ

小学校3年生の時、近所のスケートリンクに兄貴に毎回ついて行って、アイスホッケー用の靴を親に買ってもらって滑っていました。4年生の時に、先輩のスピードスケート用の靴を履かせてもらった、そのスピード感に魅せられて、いつの間にかスケートにはまっていました。冬になると、週末は決まってスケートでした。土曜日は夜の12時まで滑って、帰りは両親に迎えに来てもらうほどで。リンクにはいろんな発見や楽しみがありました。その頃の将来の夢は、電車の運転手や、父の影響から、「自動車の整備士になりたい」と小学校の文集には書いていました。

コーチの影響

僕が影響を受けた人はたくさんいますが、スケートに関しては、最初に入ったクラブのコーチが全てとっていいくらいです。練習は大変厳しいものでしたが、それがベースとなって、今の僕があります。

そのコーチの影響は今でも大きいと思います。

子どもの頃に、どのように教えられるか、どんな環境にいるのか、というのは大きいと思います。所属していたクラブにはいろんな人がいて、競争相手も多く、勝負することへの意識が高まったのではないのでしょうか。同級生に負けたくなかったですね。とてもいい環境だったと思います。

目標が定まった

1992年、アルベールビル五輪でショートトラックが正式種目になりました。高校1年生の時、初めて自分の競技をテレビで見ました。「僕の目指したいのは、これだ!」と、目標が定まりました。目標がバシッと定まった時から、練習を休まなくなり、取り組む姿勢が変わりました。学校の勉強もしっかりするようになりました。目標・目的・夢がはっきりして、強くなった気がします。その翌年、日本の代表に上ることができました。最初のオリンピックに出るまでは、本当にたくさん練習したと思います。

悔しさをばねに

1998年の冬季オリンピック長野大会は、大学4年生の時でした。「メダルを取って、一番いい時にやめよう」と思っていました。でも、いい成績がでなくて。現実には直面し、なんて甘い考えをしていたんだろうと気づき、とても悔しい思いをしました。その悔しさをばねに、それから12年間、頑張ってくることができました。その経験が非常に僕を強くしました。競技をしていたからこそだと思います。僕の人生において、大きな経験をさせてもらっていると今でも思います。いろいろな経験を積み重ねれば、人として成長している感じがします。

次世代に引き継ぐ

冬季オリンピックトリノ大会（2006年）からの4年間は、「次世代への引き継ぎ期間」と思ってやってきました。体力的にもきついし、関節も痛いし、寒いのは好きじゃないし、やめられるならやめたいと思うこともありました。今週末、選手権（オリンピック代表選考会）がありますが、僕は、今スケートをやめても全然悔いはないんです。それくらいやってきました。いざ、試合になれば、「若手には負けたくない」と思いますが、（後輩が僕を）追い抜いてくれないと。僕は、後輩に負けるまでやらないといけないと思っています。僕のピークはとっくに過ぎているので、むしろ今、抜かれても「ちょっと遅いよ」と思いますし、後輩には「僕が調子いいときに勝たないと」と言っています。寺尾悟は変わらないですから、今度の試合は勝ちたいですし、その反面、早く追い抜いていってくれという気持ちも。嬉しさと寂しさが混同しています。

また、韓国から来たコーチが日本のトップになって2年になります。新しい風が来て、指導方法が違うので、それを受けて自分がどう変わるか見てみたいという面もあります。ここまで続けてこられたのは、その2つの側面からの意味合いが非常に強いです。

このオリンピックイヤーが終われば、僕の競技生活は、お役御免かなと思っています。これが終われば、自分がやりたければやるし、やめたければやめるという権利がようやくできる気がします。野球選手のFAみたいに。（スケート選手としての）最後、どうがいいかは正直、わかりません。勝ちたいけど、最後は若手に勝ってほしい、後輩に（オリンピックに）行ってほしい。複雑な気持ちです。後輩が勝てば、「僕もまだやれるんじゃないか」というのがなくなるので、僕のスケート人生に、ひとつのピリオドを打てばいいかなと思っています。

これからの夢

会社で部下を持てるかどうかは別として、人を育て上げられるような人になりたいです。スケート連盟にもお世話になっていますので、ショートトラックのトップとして、恩返しできればと思っています。若手のコーチを育てられるようになって、選手以外として1回はオリンピックに戻りたいですね。でも、引退したら、もう、スケートには関わりたくないと思うかもしれません。

仕事では、スケートほどの自信を持ててはいないです。相手する方も多種多様になるので、まだまだ先は長いような気がします。今がしんどいと思わずに、これからもいろいろなことがたくさんあるということを肝に銘じておかないと厳しいなと思っています。

健康とは？

スケートをしているとケガをすることもあるし、気をつけていても風邪をひくこともあります。

僕は、“心が満たされていること”が一番の健康だと思っています。いつも明るく、元気に過ごすことがベースで、いろいろなことが起こっても、振り返って、ああだ、こうだと考えても、全く自分に進歩がないので、“次どう考えるか”ということが非常に大切だと思います。起こったことに対してはポジティブに、そして「こういうことも起こるかもしれない」と、常日頃から考えておくことも重要だと思います。競技においても、「ケガをすることもある」と思っています。手首をケガしたり（右指伸筋腱断裂）、胸椎を折ったり、足首をケガしたり（脛骨・腓骨骨折）、ちょっとしたことで痛くなったり、ボールがうまく投げられなかったり、「なんで？」と思う瞬間もあります。でも、伸筋腱が親指以外全部、スケートの刃で切れても、「つながって動いていること」がラッキーだなと。足首脱臼骨折しても、こうやってまた歩けてスケートを続けられて、なんとラッキーなんだ！と思います。

将来的に50～60歳で、あの時のケガで…と、落ち込むこともあるかもしれないけど、医療が発達してもっと元気になるかもしれないし、今は寂しいことは考えず、楽しいことを考えていきたいと思っています。伸筋腱を切った時は、精神的に辛い部分もありましたが、今は何にもなかったかのように生活できています。僕、“なにくそ魂！”があるんです。ケガをしても「このまま終わりたいくない」という気持ちが強くて、奮起する要因になっています。しかし、次ケガしたら、さすがに駄目だとは思いますが。そのくらい、この2月にケガをして大変でしたが、なんとかここまで来れました。

気持ちの切り替え

事前に予防することが大事だと思います。防止策として“いろんなことを想定する”ということがあります。それでも予期せぬことは起こります。そうすると、最初は、どうしてもひとりで抱え込んでしまうことが多いですが、いろいろな意見を聞くことが大事かなと思います。内容によっても変わってきますが、自分の殻にこもらないことが大事かなと。今年9月の試合で気持ちが落ち込んだ時、試合が終わった日の夜から車で出かけました。ドライブでもなんでも、違う土地に行くのは気分転換になりますね。人によっては逆にストレスがたまる場合もあるので、何もしない方がいいかもしれないですけど。また、僕の場合は、結婚したことも大きいです。ひとりで行くといろんなことを考えてしまうので、一緒に行ってくれる妻の存在は大きいです。

大事にしていること

難しいことは考えていませんが……、“いつも明るく元気でいること”と、“人に優しく接すること”、あとは、ご先祖様を大事にしないといけないと思っています。大事な試合の前後、遠征に行く前と帰って

きた時には、お墓参りに行って、じいちゃん、ばあちゃんに報告しながら、墓石を磨いてきます。初めてオリンピックに行った頃からですね。一人でできることは限られているし、人間って不思議な存在じゃないですか。いろんなことに感謝しないといけないといつも思っています。身近なご先祖様が、きっと後ろで見守ってくれていると思うので、大切にしなければいけないと思っています。お墓参りに行かないとなんかすっきりしないんです。そんな思いが年々、強くなってきている気がします。

学生たちに向けて

若い子の夢や目標って、両極端な気がします。「明日しか見えない」あるいは、「すごい先を考える」。目標があるのとないのとでは、人生設計が変わってきます。同じことをしていても、見えてくるものが違うように思います。短期的・中期的・長期的な夢が、少しずつ変わってもいいので、それを考えることによって、頭の中で逆算すると思います。漠然と考える機会が与えられますよね。小さなことでも何か目標を持って生活するのとしなのでは違うと思います。自分の趣味のことでもいいので、目的を持って生活すると、見える世界が違ってくるのではないかと思います。大学に入ったと思ったら、すぐに4年生になり、卒業となるので、何かきっかけがあるといいのかなという気がします。僕が学生の時、周りの友達には「サークルを立ち上げたい」とか、「次の大会で優勝したい」というメンバーも多く、スケート以外でも教えられたことはたくさんありました。

オリンピック最終選考会に向けて

すっきりしています。今回の大会で何が起こっても動じないと思います。むしろ、一通りを経験してきたので、どうなるかが楽しみです。5回目のオリンピック、行けるかもしれないし、行けないかもしれない。ケガしていようがいまいが、一発勝負なので、何事もなかったようにいきたいですね。「ケガしたからスタートはゆっくり目にいこう」とか、「後ろでちょっと我慢しよう」とかはなしで、いつもの僕でいきたいなと思います。そこで肉離れしてしまったら、それはそのときです。

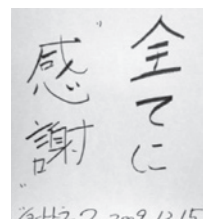
“寺尾悟の存在”を出し切りたいと思っています！

取材を終えて

トップアスリートの考え方、雰囲気には圧倒されました。笑顔が素敵で、前向きで温かいお人柄に終始感動し、紡ぎ出される言葉のひとつひとつが心に響きました。寺尾さんの持つ素敵な空気感をうまくお伝えできないのがもどかしく思います。インタビューの中で、「健康とは、心が満たされていること」とおっしゃったことが印象的でした。

なんと、帰りは愛車プリウスで駅まで送って下さいました。オリンピック選手という敷居を感じさせない、とてもフレンドリーな寺尾さん。圧倒的な強さの秘密は、鍛え上げた体力・精神力とともに、そんな“しなやかな心”にあるのかもしれません。寺尾選手のますますのご活躍をお祈り申し上げます。

(久保田・白井)



新入生合宿研修

学生厚生支援委員会委員長
看護科学コース 教授 鈴木 眞知子

新入生に対する1泊2日の合宿研修が、昨年よりも1週間早い時期である入学したその週末に、例年同様「花背 山の家」で開催されましたので、その概要をご報告いたします。

実施概要

■実施日時：平成21年4月11日（土）～4月12日（日）

■研修場所：京都市野外活動施設 花背 山の家

■研修目的：①専攻を超えた学生間、及び在学生や教職員との親睦を深める
②ガイダンスにより大学生活へのスムーズな導入を図る
③健康人間学の未来を語り合い、ともに学ぶものとしての協調と自学自律のこころざしを高める

■参加者： 人間健康科学科 1回生 140名（うち、体調不良により日帰り1名）
2～4回生、院生 27名
教職員 22名（うち、日帰り8名）

■研修内容：1) 専攻の紹介

- (1) 全専攻に向けて、教員による各専攻の説明
- (2) 専攻ごとに分かれて、上回生による各専攻の説明

- 2) 野外炊飯（カレー）
- 3) キャンプファイヤー
- 4) スポーツ：ドッジ・ビー



研修結果

本年度の合宿研修は、場所の変更も視野に入れ、滋賀県野洲市にある研修施設を年度当初に視察しました。しかし、そこではキャンプファイヤーを行うことが難しく、学生の希望により例年通り研修場所は、「花背 山の家」となりました。具体的な研修内容としては、前年度の反省を踏まえ、準備は昨年度よりも早

く、夏休み前に第1回準備委員会を開催しました。そのことにより、各委員が夏休み中におおよその計画を立て、第2回会議では、昨年度の合宿委員の参加も得て、上回生のアドバイスのもと、計画をよりスムーズに具体化していくことができました。

また、委員会会議では、・ガイダンスの内容は、教員の話と学生の話の内容が重複しないよう、早めに担当教員を決定し、事前に教員・学生間で打ち合わせをする、・スポーツをすることをあらかじめ新入生に周知し、飲み物の持参など、準備を促す、・球技は上手下手の差が出ず、怪我人が出る恐れがないよう種目は前回と同じくドッジ・ビーとする、・スポーツでの待ち時間が多く暇な時間を作らないよう工夫する、・教員は参加しやすいよう宿泊する教員数を減らし、当日のみの参加の教員を増やす、・学生と教員との接点を多くするよう各イベントの学生グループに教員を組み入れる、などとなりました。さらに、合宿研修の時期が早まったことに伴い、・入学案内送付時には合宿研修の案内文を同封する、・新入生歓迎行事の際には合宿研修のオリエンテーションを行う、・新入生のテーブルを合宿の班ごとに分け、合宿委員も担当班につき、新入生が仲良くなれるよう雰囲気づくりに努める、などの工夫をしました。

合宿当日は、ほぼ全員の新入生が揃って参加し、天候にも恵まれ、念願のキャンプファイヤーも実施できました。主事をはじめ教務担当の方々や諸先生方のご協力により、無事に合宿研修を終えることができましたことに心より感謝申し上げます。

事後に行いましたアンケート結果では、全項目について肯定的な意見が大半を占め「とても楽しかった」「他専攻の学生とも交流でき、同じ専攻の学生ともゆっくり話が出来て本当に良かった。とても充実していました。来年時間があればまた参加し、先輩方のように新入生とかかわっていいなと思いました」「この学科の人達は、先生も先輩も含め、思いやりがあって且つ、ユーモアのある方々なので、楽しく充実した大学生活が送れると思います」という感想が多く得られました。これもひとえに、半年以上をかけて検討を重ね、準備してくれた2回生の委員やボランティアで協力してくれた上回生の熱い思いによるものと思います。

その一方では、気がかりなこととして、研修施設に到着する前に緊張のためか過換気になったり、動悸を訴え、「すぐに家へ帰りたい。タクシーを呼んで欲しい」と宿泊せずに帰宅した学生などもいたことです。今後は、そのように何らかの問題を抱えた学生の入学も増えてくるかもしれません。そういった観点からも入学早期に実施される合宿研修の意義は、大きいといえます。単なるイベントに終わることのない合宿研修のあり方について、さらなる検討が求められるでしょう。



第22回健康科学市民公開講座の報告

健康科学公開講座部会長
リハビリテーション科学コース 准教授 加藤 寿 宏

平成21年11月7日「人の健康と遊び」をテーマに第22回健康科学市民公開講座を開催した。遊びは、人の生活の中で働くことと比較されるため、軽視されがちであるが、子どもの成長や発達に重要であるだけでなく、身体や心の健康を支える上で不可欠なものである。今回は、講演のみでなく実際に遊びを体験してもらうことで、遊びがもたらす、心身への影響を参加者の方と考えた。

第1講では山根教授が「人の健康と遊び」をテーマに遊びが人にとってどのような意味があるかについて、第2講は加藤が「子どもの発達と遊び」をテーマに、子どもの発達と遊びについて感覚運動遊びを中心に講演を行った。講演終了後、粘土、草細工、フラワーアレンジメント、音楽、ヨガ、子どもの遊びの6つのグループにわかれ、体験学習を実施した。それぞれのグループで受講者の表情は真剣、笑い、癒しなど様々であったが、講座の目的である、人のこころとからだの健康に遊びが不可欠であることは体感してもらえたと思う。



人間健康科学系専攻内に「杉浦地域医療研究センター」が完成

医学研究科人間健康科学系専攻 教授 野 本 慎 一

京大病院とわが専攻をはさむ鞠小路沿いには、古い建物や不格好な囲い塀が建っていて、京大病院との短い距離をいかにも遮っているような感がありました。しかし、本年6月「杉浦地域医療研究センター」の設立を機に、それらの建物が撤去され新たにレンガ敷き広場が設けられて、鞠小路側から病院西構内への新しいアプローチができました。今まで手つかずであった所がこのセンターの完成を契機に周辺環境の整備が進められ、京大病院との一体感が強まってきているように思われます。

「杉浦地域医療研究センター」は、健康で文化的な地域社会作りを目指すという人間健康科学系専攻の理念と、薬剤師として地域医療の担い手となり地域の人々に貢献したいという杉浦広一氏（愛知県安城市・スギホールディングス株式会社代表取締役会長）、杉浦昭子氏（スギホールディングス株式会社代表取締役副社長）両氏の理念が合致してその建設が決定され寄贈されたものです。平成21年6月23日に松本紘総長ほか関係者多数ご臨席の下、開設記念式典が盛大に執り行われ、引き続いて記念講演会が行われました。

杉浦地域医療研究センター（2階建鉄骨造、延床面積約500平方メートル）正面玄関を入ると「水の起源」と題する縦横約3.5mの大きな陶板（大塚オーミ陶器製）が入館者を迎えてくれます。陽が落ちると、建物玄関や周辺の植え込みにあるLEDがアンバーイエローの柔らかな光を放っています。1階には、屋外研修室1室、研修室、地域医療研究室に加え、2階には研修室および最新の映像・音響装置を備えた杉浦ホール（約100人収容可能）があり、正面からは「大文字」が一望できます。

6月に開設されて以来半年がたちましたが、この間地域医療に関するシンポジウム、フォーラム、講演会が杉浦ホールを中心に数多く催されました。今まで医療が直面する問題を考える会のほとんどはそれぞれの専門職毎に行われ、多職種の医療人が一同に集まって医療に関する問題を討議する機会がなかった中、地域医療に必要とされる多職種間の連携を考える場所として「杉浦地域医療研究センター」がその役割を提供し続けていくものと思います。

「杉浦ホール」は医学研究科構内の南端に位置し、京阪電車「神宮丸太町」駅に近くアクセスのよいロケーションにあります。これを機会に杉浦ホールが地域医療のみならず、人間健康科学の研究・交流の場として、その役割を発揮することが期待されています。杉浦地域医療研究センターのホームページも開かれ、行事予定の参照や予約も行えるようになりました。

平成21年4月から人間健康科学系専攻に博士課程「近未来型人間健康科学融合ユニット」が設置され、その中に在宅医療システムの研究を進めるための部門が設けられました。わが国の地域医療研究が進展し、国民が安心して暮らせる社会を作り上げる上で、「杉浦地域医療研究センター」が多いに活用され、大きな力になると確信しています。



杉浦エントランス廻り



杉浦夜景

平成21年度 医学部人間健康科学科入学者選抜試験結果

専攻・日程		募集人員	志願者数	合格者数	入学者数
看護学専攻	前期	70	115	74	72
検査技術科学専攻	前期	37	85	39	39
理学療法学専攻	前期	18	34	19	19
作業療法学専攻	前期	18	50	19	19
合 計		143	284	151	149

平成21年度 医学研究科人間健康科学系専攻（修士課程）
入学者選抜試験結果

コ ー ス	募集人員	志願者数	合格者数	入学者数
看護科学コース	18	36 [17]	23 [9]	19 [7]
検査技術科学コース	13	26 [3]	18 [2]	17 [2]
リハビリテーション科学コース (理学療法学講座)	4	20 [5]	12 [2]	11 [1]
リハビリテーション科学コース (作業療法学講座)	4	6 [5]	4 [3]	4 [3]
合 計	39	88 [30]	57 [16]	51 [13]

[]の数は、社会人特別選抜(内数)

平成21年度 医学研究科人間健康科学系専攻（博士後期課程）
入学者選抜試験結果

コ ー ス	募集人員	志願者数	合格者数	入学者数
看護科学コース	15	5	2	1
検査技術科学コース		1	1	1
リハビリテーション科学コース (理学療法学講座)		3	3	3
リハビリテーション科学コース (作業療法学講座)		5	5	5
合 計	15	14	11	10

人 事 異 動

発令 年月日	職 名	氏 名	所 属	異 動 事 由
平成 20.7.1	教 授	細 田 公 則	看護科学コース	昇任（京都大学大学院医学研究科講師より）
20.8.1	助 手	山 田 実	リハビリテーション科学コース (理学療法学講座)	採用（坂田整形外科理学療法士より）
20.9.30	教 授	成 木 弘 子	看護科学コース	辞職
20.9.30	助 教	鈴 木 麻 揚	看護科学コース	辞職
20.10.1	助 教	小 西 奈 美	看護科学コース	採用（元国立精神・神経センター病院看護師）
20.10.1	助 手	福 田 里 砂	看護科学コース	採用（大阪大学大学院医学系研究科博士後期課程）
20.10.1	総務担当 主 任	小 林 正 信	事 務 部	昇任（奈良教育大学秘書・企画課係長（評価担当）へ）
20.10.1	総務担当 主 任	八 代 幸 造	事 務 部	転任（ウイルス研究所主任より）
20.10.17	助 手	原 田 美穂子	看護科学コース	採用（京都大学大学院医学研究科非常勤職員より）
20.11.1	准 教 授	作 田 裕 美	看護科学コース	採用（京都大学大学院医学研究科特定准教授（改革推進）より）
21.3.31	専 攻 長 (教授)	笹 田 昌 孝	検査技術科学コース	定年退職
21.3.31	教 授	江 川 隆 子	看護科学コース	定年退職
21.3.31	教 授	林 優 子	看護科学コース	辞職
21.3.31	教 授	福 田 善 弘	検査技術科学コース	定年退職
21.3.31	准 教 授	笠 原 勝 幸	リハビリテーション科学コース (理学療法学講座)	定年退職
21.3.31	助 教	高 橋 美 和	看護科学コース	辞職
21.3.31	助 手	新 井 紀 子	リハビリテーション科学コース (作業療法学講座)	任期満了
21.4.1	教 授	荒 井 秀 典	近未来型人間健康 科学融合ユニット	昇任（京都大学大学院医学研究科講師より）
21.4.1	教 授	足 立 壯 一	検査技術科学コース	昇任（京都大学大学院医学研究科講師より）
21.4.1	教 授	中 泉 明 彦	検査技術科学コース	採用（大阪府立成人病センター消化器検診科主任部長より）
21.4.1	准 教 授	青 山 朋 樹	リハビリテーション科学コース (理学療法学講座)	昇任（京都大学再生医科学研究科助教より）
21.4.1	准 教 授	石 津 浩 一	近未来型人間健康 科学融合ユニット	昇任（京都大学大学院医学研究科講師より）
21.4.1	助 手	高 原 世津子	リハビリテーション科学コース (作業療法学講座)	採用（京都大学大学院医学研究科修士課程）

発令 年月日	職 名	氏 名	所 属	異 動 事 由
21. 4 . 1	助 手	田 中 弥 生	看護科学コース	採用（京都大学大学院医学研究科非常勤講師より）
21. 4 . 1	教務担当 専門職員	松 下 裕 之	事 務 部	転任（学生部入試企画課専門職員へ）
21. 4 . 1	教務担当 専門職員	藤 原 輝 行	事 務 部	転任（経済学研究科専門職員から）
21. 4 . 1	教務担当 事務職員	古 川 友 里	事 務 部	転任（千葉大学学生部教務課へ）
21. 4 . 1	教務担当 事務職員	谷 藤 真 紀	事 務 部	転任（契約・資産事務センター契約グループ契約担当から）
21. 5 . 1	特定助教 (科学技術振興)	布 樹 輝	検 査 技 術 科 学 コ ー ス	採用（筑波大学大学院博士後期課程修了）
21. 7 . 31	講 師	渡 邊 浩 子	看護科学コース	辞職
21. 8 . 31	助 手	田 中 弥 生	看護科学コース	任期満了
21. 9 . 30	准 教 授	星 野 明 子	看護科学コース	辞職
21. 9 . 30	助 教	澄 川 真 珠 子	看護科学コース	辞職
21. 9 . 30	助 手	原 田 美穂子	看護科学コース	任期満了
21.10. 1	特定助教 (科学技術振興)	酒 井 晃 二	検 査 技 術 科 学 コ ー ス	採用（京都大学高等教育研究開発推進センター助教より）
21.10. 1	総務担当 専門職員	吉 村 淳 郎	事 務 部	転任（医学研究科総務・人事室安全管理担当専門職員へ）
21.10. 1	総務担当 専門職員	山 田 美代子	事 務 部	転任（医学研究科総務・人事室安全管理担当専門職員から）

目 誌

20.7.3	入学者選抜検討委員会	12. 9	学生厚生支援委員会
7.10	将来計画検討委員会 教員会議 教授会議	12.11	将来計画検討委員会 教員会議 教授会議
7.11	RI 再教育訓練 安全衛生委員会	12.18	臨時教授会議 教務・教育委員会 三水会忘年会
7.12	検査技術科学コース大学院紹介	12.19	杉浦地域医療研究センター起工式
7.17	教務・教育委員会	12.24	看護卒業研究発表会
8. 7	将来計画検討委員会	12.25	将来計画検討委員会 臨時教授会議
8. 8	オープンキャンパス 2008 臨時教授会議	21.1.5	人間健康科学系専攻新年挨拶会
8.21	入学者選抜試験実施委員会大学院入試部会	1. 8	将来計画検討委員会 教員会議 教授会議
8.22	医学部保健学科3年次編入学入学者選抜試験	1. 9	江川教授最終講義 広報委員会ホームページ部会
9. 1	入学者選抜検討委員会	1.15	学生厚生支援委員会
9. 2	大学院人間健康科学系専攻入学者選抜試験	1.17	大学入試センター試験（～18日）
9. 4	入学者選抜検討委員会 臨時教授会議	1.19	五〇会総会（新年会）
9. 5	安全衛生委員会	1.21	入学者選抜検討委員会 将来計画検討委員会 臨時教授会議
9.10	高井リサーチセンター開設記念行事	1.29	臨時教授会議 福田教授、笹田教授最終講義
9.11	吉田事業場産業医巡視 将来計画検討委員会 教員会議 教授会議	1.30	博士後期課程学力検査 修士課程（2次募集）学力検査
9.12	保健学科3年次編入学試験合格発表 人間健康科学系専攻（修士課程）入学試験合格発表	2. 5	入学者選抜検討委員会 臨時教授会議
9.18	教務・教育委員会 臨時教授会議	2.12	教員会議 教授会議
9.29	入学者選抜検討委員会 将来計画検討委員会	2.13	博士後期課程合格者発表 修士課程（2次募集）合格者発表
10. 2	臨時教授会議	2.19	教務・教育委員会
10. 8	医学研究科長と教授会議の懇談会	2.23	将来計画検討委員会 臨時教授会議
10. 9	将来計画検討委員会 教員会議 教授会議	2.25	人間健康科学科前期日程入学試験（～26日）
10.16	教務・教育委員会	3. 6	広報委員会ホームページ部会
10.28	健康科学ランチョンセミナー	3. 9	入学者選抜検討委員会 臨時教授会議
10.30	将来計画検討委員会 臨時教授会議	3.10	前期日程試験合格発表
10.31	安全衛生委員会	3.12	Health Science Café（FD 討論会） 将来計画検討委員会 教員会議 教授会議
11. 7	広報委員会ホームページ部会	3.23	拡大教授会議 臨時教授会議 修士学位授与式 修了を祝う会
11. 8	がんリハビリテーション特別講演会	3.24	卒業式 卒業を祝う会
11.13	人間健康科学系専攻将来計画検討委員会 教員会議 教授会議	3.26	将来計画検討委員会
11.17	広報委員会ホームページ部会 広報委員会紀要健康科学部会	4. 6	京都大学名誉教授称号授与式 大学院新入生ガイダンス
11.20	教務・教育委員会 11月祭（～25日まで）	4. 7	平成21年度京都大学入学式 人間健康科学科新入生歓迎行事
11.27	人間健康科学系専攻将来計画検討委員会 自己点検・評価実施委員会		
11.29	第21回健康科学市民公開講座		
12. 4	人間健康科学研究会		
12. 5	広報委員会ホームページ部会		
12. 6	第4回京大関係病院を知る会		

目 誌

- | | | | |
|------|---|-------|--|
| 4. 8 | 執行部会議 | 7.30 | 臨時教授会議 |
| 4. 9 | 将来計画検討委員会
教員会議
教授会議 | 8. 5 | 学術委員会健康科学公開講座部会 |
| 4.10 | 広報委員会 | 8. 7 | 安全衛生委員会
執行部会議
オープンキャンパス 2009 |
| 4.11 | 平成21年度新入生合宿研修（花背山の家）
（～ 12日） | 8.21 | 人間健康科学科 3 年次編入学試験 |
| 4.16 | 広報委員会広報・案内誌部会 | 8.24 | 広報委員会広報・案内誌部会 |
| 4.23 | 将来計画検討委員会 | 8.25 | 大学院修士課程入学試験 |
| 5. 8 | 博士後期課程設置記念式典委員会
杉浦地域医療研究センター WG
学生厚生支援委員会 | 8.26 | 執行部会議 |
| 5.11 | 執行部会議 | 8.27 | 将来計画検討委員会 |
| 5.14 | 将来計画検討委員会
教員会議
教授会議 | 9. 3 | 入学者選抜検討委員会
臨時教授会議 |
| 5.21 | 教務・教育委員会 | 9. 7 | 広報委員会広報・案内誌部会 |
| 5.27 | 執行部会議 | 9. 9 | 執行部会議
将来計画検討委員会 |
| 5.28 | 将来計画検討委員会 | 9.10 | 教員会議
教授会議 |
| 5.29 | 学術委員会 | 9.11 | 平成22年度人間健康科学系専攻（修士課程）、
3 年次編入学、入学試験合格発表 |
| 5.31 | 国立大学保健医療学系代表者協議会看護分
会 | 9.15 | 博士後期課程開設記念式典委員会 |
| 6. 1 | 国立大学保健医療学系代表者協議会 | 9.17 | 教務・教育委員会 |
| 6. 3 | 広報委員会広報・案内誌部会 | 9.18 | 執行部会議 |
| 6.10 | 執行部会議 | 9.24 | 第12回国立大学理学療法士・作業療法士教
育施設協議会（～ 25日） |
| 6.11 | 将来計画検討委員会、財務委員会
教員会議
教授会議 | 9.26 | シンポジウム「地域医療再生にむけて」 |
| 6.12 | 博士後期課程設置記念式典準備委員会 | 9.30 | 博士後期課程開設記念行事 |
| 6.18 | 京都大学創立記念日 | 10. 1 | 将来計画検討委員会 |
| 6.23 | 杉浦地域医療研究センター竣工記念式典及
び記念講演会 | 10. 8 | 教務・教育委員会 |
| 6.24 | 執行部会議
入学者選抜実施委員会オープンキャンパス
部会 | 10.20 | 医学部解剖体祭（黒谷本山） |
| 6.25 | 情報セキュリティ委員会
将来計画検討委員会
教務・教育委員会 | 10.21 | 執行部会議 |
| 6.27 | 京大関係病院を知る会 | 10.22 | 将来計画検討委員会
教員会議
教授会議 |
| 7. 2 | 広報委員会広報・案内誌部会
第55回全国国立大学法人助産師教育専任教員
会議（～ 3 日） | 11. 4 | 執行部会議 |
| 7. 4 | 第1回「地域医療を考える」フォーラム | 11. 5 | 将来計画検討委員会 |
| 7. 8 | 執行部会議 | 11. 7 | 第22回健康科学市民公開講座 |
| 7. 9 | 将来計画検討委員会
教員会議
教授会議 | 11.10 | 博士後期課程入学者選抜試験 |
| 7.16 | 教務・教育委員会 | 11.12 | 教務・教育委員会 |
| 7.22 | 執行部会議
広報委員会広報・案内誌部会 | 11.18 | 執行部会議 |
| 7.23 | 将来計画検討委員会兼人権問題対策委員会 | 11.19 | 将来計画検討委員会
教員会議
教授会議 |
| 7.24 | 博士後期課程設置記念式典委員会
学生厚生支援委員会合宿部会 | 11.20 | 11月祭（～ 23日まで） |
| 7.25 | 検査技術科学コース（博士・修士）
入学案内・研究室紹介 | 11.21 | 第7回近畿チーム医療フォーラム |
| | | 11.27 | 博士後期課程入学試験合格発表 |
| | | 12. 2 | 執行部会議 |
| | | 12. 3 | 入学者選抜検討委員会
将来計画検討委員会 |
| | | 12.10 | 教務・教育委員会
臨床実習指導者会議 |
| | | 12.16 | 執行部会議 |
| | | 12.17 | 将来計画検討委員会
教員会議
教授会議 |
| | | 12.25 | 産学連携シンポジウム 2009 |

あ と が き

広報第9号をお届けします。

今年度も、前年度同様年1回の発行になりました。一年半の間隔が空いてしまったことについては申し訳なく思っています。

さて、当人間健康科学系専攻では、今年度、博士後期課程が発足し、大学院としての形がほぼ完成致しました。本号では、9月に行われた記念式典の紹介記事を掲載しています。

また、本号では、新しい試みとして、有名スポーツ選手へのインタビューということで、スピードスケートショートトラックの寺尾選手のお話を掲載させていただきました。本専攻のリハビリテーション科学コースとのご縁で実現した記事です。

是非ご一読下さい。

一方、今や情報発信の中心となりつつあるインターネット関連では、ホームページのリニューアルが進んでおり、よりわかりやすく的確な情報の発信に努めてまいります。

この広報誌の様な印刷媒体での情報発信については、これからも検討が続くことになります。広報委員会としては、より広く情報を提供できる様に努力してまいりますので、お読みになる皆様のご意見もお聞かせいただければ幸いです。

広報委員会 広報・案内誌部会長
大塚 研一

〒606-8507 京都市左京区聖護院川原町53
<http://www.hs.med.kyoto-u.ac.jp/>